第２回地域連携コンソーシアム（記録）

日時：令和６年９月４日（水）
午後１時～午後３時
場所：秋田県生涯学習センター
４階　第１研修室

	記録①
	１　開会 **２　県教育庁生涯学習課長あいさつ** **３　説明（10 分）** **・「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」秋田大会** **４　協議（90 分）** **（１）協議①（45 分）** **・「コンファレンスの内容について」**
藤井委員長	コンファレンスの内容について、障害のある方々の生涯学習をもっと広めていく視点、一般の方々や関係者の方々に広く知っていただく機会とするための内容、周知の方法について、御意見をいただきたい。
奈良委員	それぞれの障害福祉サービス事業所が県に登録しているメールアドレスがある。メールで知らせていただくことで、各所で必ず目を通すので、参加を検討していただけるのではないか。また、大仙市で言うと、相談支援の協議会で協力を求めていくとよいと考える。
藤井委員長	県の障害福祉サービス事業所は 400 か所程度あるだろうか。障害福祉課でメールの一斉送信はお願いできるものか。
櫻田代理	メールアドレスの登録があるので、依頼があれば承りたい。
田中委員	メールでお知らせしても、その先の個人へ確実に伝わっていかないことがあることを実感している。 今回のコンファレンスには、どのくらいの人数を集めるつもりか？駐車場の確保や多くの人数が来たときの対応など課題があると思う。
事務局	たくさんの方が参加希望してくれることはありがたいと感じるので、上限なく参加を募った方がよいと考えている。ただし、全体の参加人数は精一杯で 300 人程度と考えている。講堂には、その半分の人数の 150 人程度は入ることができる。ぜひ、そのような状況を作れたらと思う。
佐々木委員	障害のない方への周知はどのような形で行っていくのか。私たちは、小・中学校、高校にパラ学習の依頼を受けて、車椅子バスケやボッチャなどの体験を実施している。その際、関係団体と一緒に学校へ行くなどの協力をいただいている。学校やその関係団体等に周知してもよいか。 また、当日の流れや各体験の募集人数はどれくらいを想定しているか。
事務局	ワークショップブースについては自由参加とし、当日参加が可能な準備を進めたいと考えており、人数は想定していなかった。「スポーツと文化活動を通した学びの場」では、５人ずつくらいで回せるとよいと考える。「販売を通した交流と学びの場」では、現在計画しているブース数から、十分なスペースを用意できていると考える。
	記録②へ

	記録②
事務局	「ハイブリッドでつながる誰もが参加できる学びの場」は 100 人程度、「職業スキルの向上や定着に関する学びの場」では、30 人程度と考える。 小・中学校や高校への周知については、ぜひ、していただきたい。障害のある方もない方も一緒に体験して交流する機会になれば、思い描いていた形となる。
斎藤委員	12 月 26 日の開催となると、足下が悪くなる可能性がある。中には、車椅子の方もいらっしゃると思うが、そのときには駐車場の問題が出てくる。駐車場を予約できるようにし、駐車が確定できれば、参加してくださる事業所もあるのではないか。
神原委員	参加者募集について、例えば企業の団体などにも、どんなことをしているのか知りたいと思っている方がいらっしゃるので、周知できるとよい。代表の方に声を掛けると、一斉にメールでお知らせいただけると思う。
渋谷委員	栗田支援学校は、260 名が在籍しており、自分で参加できる生徒や家族と一緒に参加できる児童生徒がいる。ちらしがあれば、全校に周知する。ちらしには、グーグルフォームで参加のとりまとめができるようして二次元コードを掲載してはどうか。グーグルフォームを募集要項とし、配慮事項等の記載やワークショップの申込状況などを表示することで、事務局側は来る人を事前に把握したり、参加希望者はワークショップの締切状況を見て、別のイベントに参加しようかなというような考えにつなげたりできるのではないか。紙に書いて集めてから、実は参加希望者がいっぱいで参加できないという状況になっては、選び直しの状況が生まれ、手間がかかってしまうので、二次元コードを活用するとよい。 本校の児童生徒の場合、大雪でもない限り、歩いてくることも可能な児童生徒もいる。 参加者の一人として、特別支援学校の教職員も生涯学習について学ぶ、進路研修の機会として捉えて参加することも考えられる。
山口美委員	ちらしをもらえれば、PTA 連合会でも配付は可能である。また、先ほど話があったように、二次元コードで参加申込ができると円滑である。 保護者の立場から、メールでのお知らせについて、メールが来れば一度は見る。しかし、その後忘れてしまうことがある。ちらしがあれば、掲示しておくことができ、いつでも見られるように工夫できるので便利である。
藤井委員長	次に、ワークショップの後に振り返りの時間「がやがやタイム」を設けたいとのことだった。障害のあるなしに関わらず、もっと学びたいことや楽しかったこと、交流して気付いたこと、次があればどうして欲しいかなど、感想を共有して学びにつなげるため、参加者でグループを作って意見交換を進めるとのことだった。事務局からは、進め方として、誰がどのように進めるとよいか悩んでいるとのことだったが、この「がやがやタイム」について、御意見をいただけないか。
今井委員	ワークショップを開いた方々の趣旨や参加者の貴重な感想をどのようにつなげていくか、進め方によって善し悪しが分かれる。参加者の意見や感想をうまく吸い上げ、その後の展開につなげられるとよい。
櫻田代理	コンファレンスの趣旨に沿った形で行うとすれば、障害のある方もない方も一緒に体験して共感を得ることで、理解が進むと考える。ワークショップの中で、そうした障害理解が進むよう、一緒に体験できるような仕組みがあるとよい。
	記録③へ

	記録③
阿部委員	話を聞くだけではなく、一緒に体験をすることが、障害者の生涯学習について知っていただく上で大事だと感じた。障害者の生涯学習について、広げていくためには一般の方が障害のある人と接したことがない、話したことがないという点がまだまだ多いという話もあった。ぜひ、このワークショップで支援されている方々や学生さん、作業製品を一緒に作っている職員の方だけでなく、当事者の方も一緒に参加していただきたい。その中で、「これはこうやって作ったんだよ」「これを作るのは大変だったんだよ」など、当事者が話をする機会ができればいいなと考える。 「がやがやタイム」について、ファシリテーターが非常に重要だと感じた。 このコンファレンスの意義として、理解を深めていただき、県内の体制構築につなげることが大切だと感じた。併せて文部科学省では、人材育成にも資するコンファレンスと謳っている。その部分について、事務局の方ではどのように考えているか。昨年度の宮城県のコンファレンスでは、市町村の生涯学習担当に向けて研修を兼ねて開催した事例がある。もし、そのような開催方法が可能であれば、秋田県内の生涯学習担当者にも参加していただけるのではないか。兵庫県の事例だが、県内でサテライト会場をいくつか作って開催していたので、参考にして欲しい。 ワークショップブースについてだが、秋田県内には文部科学省から委託を受けている団体等が他にもあり、大館市教育委員会さんや社会福祉法人北杜さんにも発表の機会があればと思う。
事務局	障害者が学べる場を作っていく側の人たちが、各市町村の公民館職員や生涯学習担当課の方々であると考えており、当課から各市町村へ参加を呼びかけていく。コンファレンスの機会を通じて、人材育成の意味合いもあると考えていたので、趣旨に明記していきたい。
藤井委員長	次に講演について、国立市公民館長補佐の井口啓太郎さんを講師にお招きし、「踏み出そう！障害者の生涯学習から始める共生社会」というテーマでお話をいただく。井口さんは、秋田に何回も足を運んでくださっていて、秋田の進捗状況もよく把握していらっしゃる。秋田がこれからどのように進んでいくべきなのかということも、示唆に富んだお話をいただけるのではないかと思うので、どんな話題を提供して欲しいか、委員の皆様から御意見をいただき、井口さんにお願いしていきたい。
鹿子澤委員	講演には、手話通訳等は依頼するのか。
事務局	手話通訳の他、グラフィックレコーディングも依頼する予定である。
藤原代理	引きこもりの方への情報提供の在り方などを聞けると、今後の参考になると考える。
渋谷委員	ワークショップで振り返り時間を設ける予定だが、その振り返りで出た感想などで出た話を受けて、障害者の生涯学習を始めるため、継続していくためのアイディアをいただけると一連の流れのようにもなる。午前のワークショップの中で意見交換したことが、講演の話の中でも出てくると、「私の意見だ」と当事者意識が芽生えるのではないか。
藤井委員長	その他、コンファレンスの内容について、よりよいものにするためのアイディアはあるか。
鹿子澤委員	ワークショップブースは、10時から何時まで行うものか。また、ワークショップブースのテーマ例２では、販売活動と生涯学習活動の紹介を同時に行うイメージか。ワークショップブースの回し方は、例えば15分と時間を区切って回していくのか。 記録④へ

	記録④
事務局	ワークショップブース全体の所要時間は、1 時間 30 分である。ワークショップブースでは、振り返りの時間は設けず、アンケート形式で意見をいただく形を考えている。また、販売活動と生涯学習活動の紹介については、ポスター掲示で活動の紹介をしていただき、質問があればその場で回答していただくイメージであり、販売活動を同時に行うように考えた。 参加人数によっては、15 分区切りで回していくような考えも必要かと考える。
神原委員	ワークショップには、事前参加を募るということだが、一つのワークショップにしか参加できないのか。また、ワークショップブースは自由に行き来できるのか。 振り返りの「がやがやタイム」については、参加された皆さんが感想などを書いて残し、次に生かせるとよいと考える。
事務局	ワークショップブースについては、当日参加でも自由に参加していただければと思っていた。しかし、ワークショップについては、振り返りをする際に事前に参加者を把握できた方がよいと考える。グルーピングを考える上でも必要と考える。ワークショップには、一つしか参加できないのかというお話をいただき、悩むところだが、こちらも自由に参加できるように、参加者が巡れるような参加方法がよいのか迷うところである。その点について、アイディアをもらえるとありがたい。
藤井委員長	ブースごとに、大体どれくらいの人数が集まって、その方たちがどのように動いていくかシミュレーションが必要と考える。そうしたことから割り出して、例えば参加者数に若干の制限を掛けるかどうか考えていけるとよい。 「がやがやタイム」では、いろんな意見を出していただくことやそれをみんなで共有していくことを踏まえ、主催者の意図を汲み取るよい方法は、ファシリテーションに長けた生涯学習課の社会教育主事にお任せすることがよいと考える。
斎藤委員	コンファレンスには、高校生や大学生のボランティアの活用は考えているか。
事務局	先日、別のイベントで秋田大学のボランティアサークルと知り合うきっかけがあり、参加について呼びかけていきたい旨、伝えている。
	記録⑤へ

	記録⑤
	（２）協議② **・「秋田県の今後の展開について」**
藤井委員長	秋田県の目標として、県内 25 市町村障害者が参加できる講座の開催や８障害保健福祉圏域で障害者のための生涯学習を実施とあるが、市町村から「障害者の生涯学習開催のノウハウ」「支援者の確保」「障害理解」等が課題として挙げられている。一方、障害者の生涯学習に積極的に取り組み始めるなど、推進されている市町村もある。推進されているところの要因は何か事務局に伺いたい。
事務局	本事業の再委託先では、学習プログラムの開発や開催だけでなく、連絡会を開き情報共有や役割分担を行っていただいている。その連携の在り方や協働の形は様々であるが、本事業を通してネットワークを構築したことで、再委託先等の目標ややりたいことを共有でき、自分事としてとらえて一緒に活動しようとする動きが見られた。再委託先が中心となり、関係者が障害者の生涯学習について意識を高められたことが大きい。再委託先の秋田ハートネット「愛仙の華」の小松管理者は、「人と人とのつながりの大切さを感じる。」「学校や市町村は人事異動があるため、我々とのそれまでの連携が途絶えてしまうこともある。」「事業を引き受けて分かったが、私たちも地域貢献を考えてきていたが、社会に開けてなかった。」「新しいことは億劫だが職員全員に気付きがあった。」「ネットワークの場や機会が必要と感じている。」と話してくれた。市町村に限らず、単独で何かを進めることは難しい。現在もオーダーメイド型社会教育主事派遣を活用して生涯学習センターと協働したり、再委託先の連絡会のようなネットワークを構築したりしているところが特に進んでいるのではないかと分析している。そのため、今後の展開としては、各圏域で各市町村等が横並びでつながるネットワークを構築し、障害者の生涯学習支援に一緒に取り組んでいくことで、充実した取組が少しずつ育まれると考える。
藤井委員長	各圏域で市町村等が横並びでつながっていき、そのようなネットワーク構築が必要である。そして、一緒に生涯学習の推進に取り組んでいくことが求められるという説明だったが、御意見等いただきたい。
藤原代理	横手市では、本事業の再委託を受けている団体等はないが、障害福祉サービス事業所等では、生涯学習と同様の活動が見られる。しかし、福祉部局と生涯学習課との連携は、これからの取組となる。今年度のコンソーシアムの機会を生かして、障害者に対する受入体制が広げられたらと考える。
田中委員	行政が主導しながら生涯学習を進めるのは、限界が来る。共生社会を目指すとすれば、障害者の周りの人々、または障害者以外の人たちがどのようにその障害者を支えていくかということを進めていかないといけないと感じる。私は、民間でも理解がある企業が増えてきているので、そうした個人や団体が音頭をとって進めていく機会を作っていかないと、共生社会は進んでいかないのではないかと考える。 例えば、心いきいき芸術文化祭の（当日、秋田県身体障害者福祉協会から配付された）ちらしだが、これを複数の企業や秋田駅で配布すると聞いている。障害福祉とは関係のない場所にも、アプローチしていかなければいけない。県や市町村が中心となることも今は必要だと思うが、理解を広げることを考えていかなければならない。 自治体だけでは限界があるし、予算の問題もあるので、広くいろんな方に知ってもらう機会を作った方がいいのではないかと考える。
	記録⑥へ

	記録⑥
鹿子澤委員	先ほど紹介いただいた「心いきいき芸術文化祭」は、9月20日から22日まで、にぎわい交流館AUで開催される。こちらは、障害者を中心としたイベントだが、一般の方向けに、障害に関する体験として視聴覚障害者の体験がある。 他にも島根県の福祉団体による特別講演や障害者が作成した芸術作品の展示、制作物の出展等もあるので、足を運んで欲しい。
藤井委員長	「連携」をキーワードに挙げると、障害当事者と生涯学習の社会資源をどのように結びつけていくかとか、一人一人が違う多様なニーズにどのように応えていくかということは、一つの機関では不可能に近い。それぞれがもっているノウハウやコンテンツを少しずつ共有し、みんなでつくり上げていくことが重要である。まさにコンソーシアムのような形が必要になってくると個人的には感じている。
斎藤委員	初年度から地域連携コンソーシアム委員を務めており、障害者の生涯学習を広めていくためには、総合支援協議会（自立支援協議会等、各地で呼び名は変わる）を活用してはどうかと、ずっと話している。秋田市では、総合支援協議会（以下、協議会）の中に、相談支援部会がある。秋田市内24か所の相談支援事業所の相談支援専門員と社会福祉協議会の方々が構成員として参加しているが、今年度の部会のテーマの一つに、生涯学習を取り上げた。もう一つは災害についてである。秋田市内を中心に活動しているので、先ずは秋田市内での生涯学習や余暇支援について何があるか確認しようと思っている。各市町村には、生涯学習担当課があると思うが、秋田市では生涯学習室があり、障害者の生涯学習についてどのように思っているのか、どのようなメニューがあり、参加できるものがあるか確認していきたい。そして、来年度は、得た情報をどのように広めていくかということにつなげていきたい。県内25市町村で協議会は行われているが、広域で活動しているところが3か所（「湯沢・雄勝圏域（湯沢市、羽後町、東成瀬村）」、「北秋田圏域（北秋田市、上小阿仁村）」、「南秋地区（五城目町、八郎潟町、井川町、大潟村）」ある。秋田県内には、合計で19か所の協議会があるが、各協議会には相談支援員が絡んでいる各部会があるので、その部会を活用していくのがよいのではないかと初年度から話してきている。ようやく秋田市の協議会でもこのテーマで協議をしていきたいと考えている。それを基に、福祉だけではなく、教育や労働関係等との連携も含めて協力しながら広めていければと考えている。
藤井委員長	障害保健福祉圏域の方に一つのユニットとして、連携が図られているという状況を伺うことができた。 そちらの協議会に生涯学習担当課の方は、入っていますか。
斎藤委員	秋田市の場合は、相談支援部会と就労部会、児童部会の三部会制になっている。他市町村の協議会でも、ぶら下がりの部会があり、他のところでは生涯学習担当課の方が入っているところもあるかもしれないが、秋田市では入っていない。しかし、部会の中で、そのぶら下がりでプロジェクトチームを作ることもできるので、課題に合わせて招集できると考える。
藤井委員長	障害のある人と社会資源をどのように結びつけていくのかという点について、連携をキーワードに神原委員にもお話を伺いたい。
神原委員	障害当事者の皆さんは、それぞれやりたいことが違うので、学びたい希望があったときに、どこにつなげていくかが重要である。そうした情報が集約されているものがあるとよいと考える。
	記録⑦へ

	記録⑦
神原委員	また、サークル的なものとは違い、個別でジムに行くことを楽しんでいる方もいる。例えば、ブラウブリッツ（プロサッカーチーム）やハピネッツ（プロバスケットボールチーム）などで余暇を楽しんでいる方も多い。民間の施設に馴染んで活動している方も多いので、そこから学びにつなげていくこともあると考える。例えば、ブラウブリッツの方を講師にして話を伺う機会があってもよいと思う。
藤井委員長	キャリア教育の充実や生涯学習の推進が学習指導要領に明記されているが、特別支援学校では、学校卒業後の学びにつなげられるような取組について、在学中から進めていること、在学中に関係機関を利活用していることなど、お話しいただけないか。
渋谷委員	高等部になると、職業に関する学習の時間が増えるが、「働く」「暮らす」「楽しむ」という三本柱を学習の中心に据えて、卒業後の生活に向けて学習している。「暮らす」「楽しむ」に関連して、例えば校外学習で図書館を利用する、実際に自分の図書館カードを作るなどして、地域の資源を活用している。また、高等部３年生になると、社会に出るための身だしなみについて学ぶ。女子生徒の場合は、化粧の仕方や洗顔の方法などを学ぶ。男子生徒の場合は、スーツの着こなし方やネクタイの結び方について、実際に店舗に行ったり、講師を招いたりして学んでいる。 最近は、物価高でお金を使う活動は、家庭の負担になることもあるので、難しくなってきているが、以前は校外に出かけて余暇活動を楽しむなどの学習も行っていた。これらの「暮らす」「楽しむ」活動を通じて、「働く」ための明日のエネルギーにつなげることを学び、地域資源を活用する方法を学んでいた。 また、地域の水泳やダンスのサークルに在籍している生徒もおり、卒業後も継続している。他にも、学校では同窓会活動を行っており、学校職員以外の人材も活用したいと考えている。また、卒業生の同窓活動の充実につながるよう、在学時から生涯学習センターなどを利用することで、卒業後の活用につながるのではないかと考える。
今井委員	視覚支援学校では、見えにくさや見えないなどの障害がある児童生徒が在籍しており、一般の方が普段の生活で理解していくような事柄が難しい部分がある。そのため、本物に触れてみる活動などを通して、ゆっくりと学んでいる。児童生徒の興味・関心に応じた教育活動を大切にし、自ら学びを深められるよう、学校内だけでなく、いろいろな場所に出て本物を知ることから学びを進めている。 学年が上がるごとに、社会との接点が大事になってくる。視覚障害者の場合、特に移動面が課題として大きい。自分で移動できない場合は、代替手段を使うことを学び、自分から外出できるようにして卒業を迎えられるように指導している。
藤井委員長	障害特性に応じた学びの確保や学びにアクセスするまでのところは、やはり大きな課題になっていると捉えた。 さて、既にある組織の有効活用の模索として、コミュニティ・スクール（以下、CS）の活用ということについて、御意見をいただけないか。
阿部代理	県立特別支援学校 14 校のうち、CS を導入しているのは、ゆり支援学校 1 校である。ゆり支援学校は、平成 30 年度から CS を導入して、地域と一緒に学校の在り方などについて熟議を進めている。今年度は、9 月 20 日（金）の第 2 回学校運営協議会の中で「学校卒業後も学び続ける」ということをテーマにして、地域の方々が卒業生のために、どんなことができるのかという熟議をするとのことだった。 県内では 1 校のみの CS 導入だが、CS とは謳っていなくても、各校「地域と共に」をテーマに掲げ、CS と類似の取組を行っている。
	記録⑧へ

	記録⑧
阿部代理	例えば、昨年のコンファレンスで話題提供いただいた大曲支援学校せんぼく校では、同窓会活動を学校だけではなく、仙北市中央公民館や社会福祉法人秋田ふくしハートネットと一緒に行っている。せんぼく校の卒業生向けのイベントだけでなく、地域の一般の方にも今年度参加いただいたと聞いている。こうした取組をいろいろな学校に広げていきたいと思っている。
藤井委員長	地域とのつながりを使いながら、それぞれのもっている強みやノウハウを共有し合っているという事例の紹介だった。県内の特別支援学校は、地域とつながりを大切にしてきているので、特別支援学校を巻き込みながら、各市町村教育委員会や障害保健福祉圏域の方々と連携をしていくことは、非常に効果的ではないかと考える。
斎藤委員	先ほど総合支援協議会の話をしたが、秋田市は協議の議題として挙げているが、その他の 19 か所の協議会にアンケート調査をしてみてはどうかと考えた。「秋田県の障害者の生涯学習（福祉の分野では余暇支援）についての動きはこのようになっているが、各地域での状況はどうか。議題に挙げられることはないか。または課題になっているか。」というように、アンケート調査をとってもよいと考える。
田中委員	県障がい者総合支援協議会でも何かやらなければいけないと思っている。アンケート調査のようなことから始めようと思っていた。他の団体からも話題に挙げられていたので、各団体がどういうことをやっているのか把握して取組を進めていきたい。
藤井委員長	ぜひ、よろしくお願いします。これも一つの連携の形かと思う。 それでは、皆様から活発な御意見をいただき、感謝申し上げる。最後に、山口副委員長から講評をいただく。 **５　講評（副委員長）**
山口副委員長	本日は委員の皆様のお話を聞いて、大変勉強になることばかりだった。このような会議があることが、とてもよいことだと改めて実感した。 感想のようなことになるが、生涯学習自体が広くて捉えにくいというところがある。我々、よく「学び」と言うが、学校の勉強や学習などというものより、自分が変化していく過程そのものみたいなものを「学び」と言っている。人が人に関わって変容していくなど、そういうところに関わるものであれば、全て生涯学習と言っているところがある。 12 月のコンファレンスの内容を見ると、体験型の催しがあり、ワクワクするような、誰でも楽しめるようなものがラインナップとしてあった。「ちょっとやってみようかな」と、誰でも参加できるよう、敷居をあえて低くした催しを繰り返していくことで、「行ってみたら楽しい」ということを感じていく。そのようなことをやっていくというのが、生涯学習には大切なところなので、すごく楽しみだなと思っている。 この議論の中で、駐車場の配慮などの合理的配慮のことを含めて、皆さんの御意見を聞いて一つの場をつくっていくところに、すごく期待がもてるコンファレンスだと感じた。 今後の展開については、福祉や労働、教育の連携というところがあった。生涯学習は、総合行政的な形で出てきたというところがあり、教育に限るものではないという形で出てきている。生涯学習なので、教育を軸にしながらも福祉や労働の領域と関わっていき、「できることから一緒にやりましょう」という形でつなげていくというところが、まさに生涯学習がやるところだなと感じて聞いていた。 **記録⑨へ**

	記録⑨
山口副委員長	「楽しいな」とか「大切だな」というように、自ら高まろうとする人が増えてくると、横のネットワークも広がっていきやすいと思うので、そこを目指していけたらと思う。 特別支援学校でも、自己充実、余暇活動、地域連携の部分など、CS や生涯学習に入れて進めているということだった。そもそも学校教育も、生涯学習の領域に入っているものなので、非常に親和性がある。社会との接点を作るという発言があったが、そのようなところが、社会教育、生涯学習が大切にしているところなので、特別支援教育との関わりを進めると、より生涯学習が豊かになっていくなと感じた。 委員の皆様の御意見に「その通りだな」と思いながら聞いており、大変勉強になった。感謝申し上げる。今後ともよろしく。 **６　その他（諸連絡）** **７　閉会**